

◆テーマ◆ ネットで親しむ文豪作品

図書室の本でも、インターネットの青空文庫でも、どちらでも読める作品を紹介します。

●^{みかん}蜜柑 ^{あきたがわいのすけ}芥川龍之介

著者の芥川龍之介は、国語の教科書にも登場する有名な文豪。1892年生まれ。35年の短い生涯に、多くの作品を残しました。平安時代の説話集にヒントを得た『羅生門』『鼻』などの小説や、児童向けの『蜘蛛の糸』『杜子春』などが有名です。

今回紹介する『蜜柑』は、小説というより、エッセイに近く、著者が横須賀線の列車内で目撃したことを書いたものとされています。そのころの横須賀線は、煙をはいて進む蒸気機関車（SL）でした。

SLは、窓を開けたままトンネルに入ると、煙が車内に充満します。トンネル内では窓を開けないのが乗客の常識でしたが、この日、語り手の「私」が乗り合わせた2等車両では、ちょっとしたハプニングが起こったのです。

2等車両は、今でいうとグリーン車。当時はハイクラスな人々が乗る車両です。そこに、3等切符をにぎりしめた貧しい身なりの少女が乗り込んできて…。

●^{ゆめじゅうや}夢十夜 ^{なつめそうせき}夏目漱石

「文豪」といえばまずこの人、夏目漱石。『坊っちゃん』や『吾輩は猫である』を始め、多くの作品があります。

今回紹介する『夢十夜』は、漱石が見た夢の話、という設定で、1908年の夏、朝日新聞に連載されたもの。第一夜から第十夜までの十話は、基本的にそれぞれ独立した話なので、どれから読んでも大丈夫。

死んだ恋人との再会を描き、幻想的な美しさが際立つ第一夜、その怖さにゾッとする、怪談仕立ての第三夜、鎌倉時代の天才仏師・運慶が明治時代に現れたという設定の第六夜、あたりがおすすめです。

また、実は第八夜と第十夜だけは、少しだけつながっています。どこでつながっているか、みつけてみてね。鍵となるのは一人の登場人物。そしてこの人、第十夜では豚を相手に大活躍します。（この話は、聖書にその題材があるのだとか。）

いずれの夢も、私たちが見る夢がそうであるように、時として唐突で、奇妙な展開を見せます。なんかよくわからない話、と感じたとしても、それは夢の話、なのですから。



本で読む 図書室には、現代のイラストレーターが、美しい絵本に仕立てた『蜜柑』（芥川龍之介＋げみ）『夢十夜』（夏目漱石＋しきみ）【ともに立東舎 乙女の本棚シリーズ】などがあります。



WEBで読む 『蜜柑』『夢十夜』とも、青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp> で、無料で読むことができます。PCやスマホ等でアクセス可能な人は、トライしてみてください。（専用アプリを使うと電子book形式で読むこともできます。専用アプリには無料のもと有料のものがあります。）青空文庫の『蜜柑』『夢十夜』には、旧仮名遣い・現代仮名遣いの2種類がありますが、まずは現代仮名遣いのものでスタートしてみましょう。

